

【発行者】新潟農業普及指導センター
新津庁舎：0250-24-9624、津川分室：0254-92-0965

全量1等米生産に向けて 籾黄化率を確認し、適期に収穫を！

ここがポイント！！

- 1 出穂期後25日までは飽水管理を徹底する。
- 2 出穂後積算気温（表1）を参考に収穫日を予測し、収穫計画を立てる。
- 3 籾の黄化率を確認し、適期（黄化率85～90%）収穫と適正な乾燥・調製を行う。
- 4 収穫後は、稲わら・籾殻を10月中旬までに本田にすき込む。

1 登熟期間の水管理

- (1) 出穂期後25日までは飽水管理^{*}を継続する。
ア 早期落水は下位葉の枯れ上がりや倒伏を助長し、登熟不良による品質低下を招く（図1）。
イ 成熟期が遅い品種は、最終通水日にしっかり湛水する。
- (2) 異常高温やフェーン現象が予想される場合は、あらかじめ湛水する（ただし、長期間の湛水状態は厳禁！）。

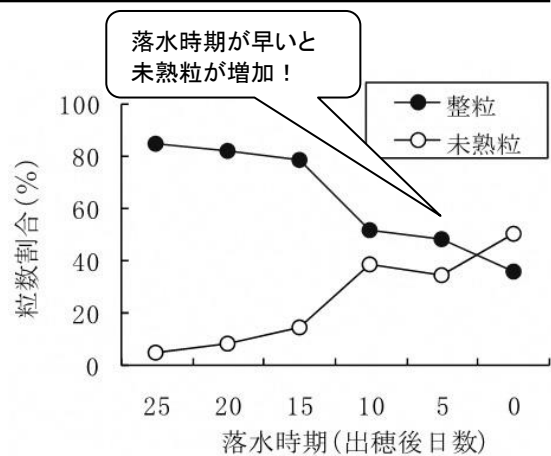


図1 落水時期と米品質

※飽水管理：水尻は止水し、自然減水で田面の水が無くなり、溝や足跡の底に水がたまっている箇所が散見される状態になったら、かん水する。

2 適期収穫

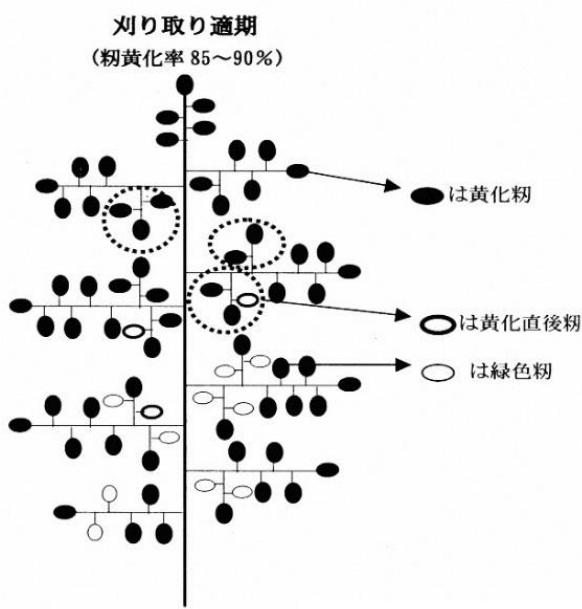
表1 収穫適期のめやす（8月16日現在）

品種		出穂期 ^{※1}	収穫適期の 出穂後積算気温	収穫適期 ^{※2}
早生	新潟次郎(飼料用)	7月19日	1,000℃	8月28日
	五百 (新潟・五泉)	7月20日	975℃	8月28日
	万石 (阿賀)	7月24日		9月3日
	わたぼうし	7月23日		8月31日
	ゆきん子舞	7月25日		9月2日
	こしいぶき	7月26～27日		9月3日
中生	こがねもち	7月31日		1,000℃
	コシヒカリ(5/5植)	8月6～7日	9月17日	
	コシヒカリ(5/10植)	8月8～9日	9月19日	
晩生	新之助	8月13日	1,050～1,100℃	9月28日

※1 早生・中生は5月5日植え、新之助は5月中旬植えを想定。

※2 新津アメダスを活用した結果(五百万石(阿賀)のみ津川アメダスを活用)。今後の気象により変動する可能性あり。

- (1) 出穂後積算気温を参考に収穫日を予測し、収穫計画を立てる (表1を参照)。
- ア 8月16日現在、高温登熟となっていないが、今後、高温登熟条件となった場合は、後日の情報を参考に収穫日を決める。(高温登熟年は、平温年より2日程度早く収穫する。)
- イ 中生・晩生品種では、今後の気象により収穫適期が変動する可能性も考えられるため、今後の情報に注意し、適期に収穫する(9月上旬発行予定の稲作速報No.9で追加情報記載)。
- (2) 実際の収穫は、黄化籾の割合が85~90%になった頃とする (図2を参照)。
- ア 収穫が早すぎると青米・未熟粒の混入増加や収量低下の原因となる。
- イ 収穫の遅れは胴割粒・着色粒等の増加による品質低下を招く。
- (3) 墨黒穂病や稲こうじ病が発生したほ場では、稲体が乾いた状態で収穫し、無発病ほ場とは別に乾燥する。



【黄化籾率の調査方法】

- ① 1次枝梗が9本程度の平均的な穂を選ぶ。
- ② 上位3本目及び4本目の1次枝梗に付いている籾が全て黄化しているか確認する。
- ③ 上記について、10本の穂で確認し、8本以上該当したら刈取適期とする。

図2 刈取適期における1穂内の籾変化状況

コンバイン事故の特徴と対策

コンバイン事故の特徴

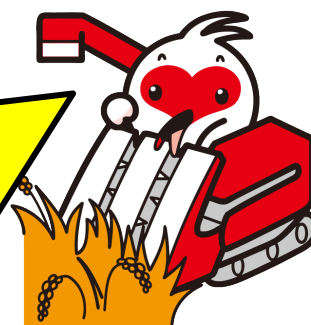
- ①移動・走行中(特に、バック時に転落・転倒)による事故 : 34.7%
- ②つまり除去(エンジンを止めずに)による事故 : 20.4%
- ③整備・点検・修理中の事故 : 16.8%
- ④手こぎ中、巻き込まれた事故 : 14.3%

全体の
86.2%

対策

- ①周囲に人がいないことを確認し、後退時は後方を十分確認しましょう。
- ②回転部や刃物が多いため、詰まったときは必ずエンジンを切りましょう。
- ③整備の基本をおさえ、危険箇所を事前に把握しましょう。
- ④たるみのある手袋の使用は避け、手こぎ位置・足場に注意しましょう。

農作業事故の対面調査(一般社団法人・日本農村医学会)より



3 適正な乾燥

- (1) 食味低下防止のため、張り込み時の籾水分に応じた送風温度を設定する（表2）。
- (2) 胴割粒の増加防止のため、毎時乾燥水分が0.8%を超えないよう、ゆっくり乾燥する（立毛胴割の発生が懸念される場合や、収穫時の籾水分が20%以下の場合、毎時0.5%以下とする）。
- (3) 籾水分のばらつきが大きい場合（フェーン現象時の収穫や、倒伏ほ場で大きくなりやすい）は水分18~20%で乾燥を一旦停止し、半日程度貯留して水分ムラを解消した後、再乾燥を行う。
- (4) フェーン現象時に乾燥を行う場合は、日中は常温の通風乾燥とする。加熱乾燥は夜間に行い送風温度を通常より低めにする。
- (5) 仕上げ水分は15%を目標とし、以下の点に留意する。
 - ア 水分が17%以下になったら、手持ちの水分計でこまめに測定する（乾燥機の自動水分計は青米・屑米混入が多いと精度が下がるので注意）。
 - イ 乾燥終了後の水分変化も考慮する。青米・屑米混入が多いと玄米水分が増加する（表3）。
 - ウ 籾水分のばらつきが大きいほ場では、過乾燥や乾燥終了後の玄米水分の戻りが生じやすいので、青米や屑米を除いた整粒の水分を手持ちの水分計で必ず確認する。

表2 張り込み時の籾水分と乾燥温度

張り込み時籾水分	28%以上	24%以上	18%以下
送風温度	40℃以下	50℃以下	昼間は通風循環 水分ムラ解消後の夜間頃から乾燥温度を低めの加熱乾燥

表3 乾燥後の水分変化のめやす（富山農試）

100粒中の青米・屑米粒数	乾燥終了後の水分変化
5粒以下	0.5%乾燥進む
6~11粒	ほとんど変わらない
11粒以上	0.5%水分戻る

4 丁寧な調製

- (1) 籾すり
 - ア あらかじめ籾すり機のゴムロールの摩耗状態を確認する。脱ぶ率が80~85%になるようゴムロール間隔を調節する（基準0.8~1.2mm）。
 - イ 肌ずれ防止のため、籾温度が常温近くまで下がってから行う。
- (2) 米選
 - ア 1.85mm以上のふるい目を使用し、適正な流量で選別する。
 - イ 未熟粒や被害粒が多い場合は、流量をしばり屑米除去の精度を上げたり、1.9mmのふるい目や色彩選別機を利用し、整粒歩合を高める。

5 次年度に向けた土づくり

- (1) 稲わらの秋すき込み

稲わらの秋すき込みは堆肥施用と同等の「土づくり」効果があるため、以下の点に注意して実施する。（雑草イネの発生している場合は、防除対策として秋すき込みは行わない。）

ア 稲わらのすき込みは収穫後なるべく早く、遅くとも10月中旬までに行う。（秋が深まり気温（≒地温）が低くなると、すき込んだ稲わらは分解しない）

イ 耕深は5～10cmの浅うちとし、稲わらと土壌を十分に混和する。（稲わらすき込み時に深耕すると、下層の稲わらは分解しない）

（2）ケイ酸供給源として籾殻の有効利用

ケイ酸質資材の施用により、稲体の健全化、耐倒伏性強化、病虫害の抵抗性強化、高温ストレスの軽減による登熟の向上等が期待される。しかし、多くの水田土壌でケイ酸が不足しているため、以下の点に注意し、籾殻（ケイ酸を約20%含む）を稲わらと一緒に水田へすき込む。

ア 籾殻の施用量は各ほ場から得られた籾殻量を基本とし、均一に散布する（籾殻を多量に施用すると、翌年、ワキの発生等で稲の生育が抑制される）。

イ ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の籾殻や、雑草種子が多量に混入した籾殻は施用しない（翌年の稲の病気や雑草の発生源となる）。

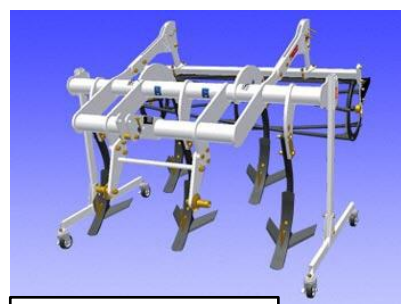
玄米収量 540kg/10a の水田から得られる籾殻（約 130kg/10a）を全てほ場に還元すると、ケイカル 80～100kg/10a 施用と同等の効果が期待でき、土壌物理性（通気性や透水性）も改善する。

（3）堆肥や土壌改良資材の積極的な施用

ア 土壌診断に基づき、不足している成分を補う土壌改良資材を施用する。

イ 稲わらや堆肥などの有機物の投入は、地力増進や土壌物理性の改善に効果的である。

ウ チゼルプラウによる粗起こしは、ほ場の排水性を向上させ、稲わらの分解促進や乾土効果による初期生育の向上、春作業の効率化等が期待できる。



チゼルプラウ

メルマガ登録募集中！〈申込先〉 ngt112130@pref.niigata.lg.jp

件名に「作物技術情報メルマガ登録希望」、本文に「名前」「住所」「電話番号」をご記入ください。

